

《米作りの流れ①》

花や樹木の新芽が膨らみ始め、春の気配が感じられるようになりました。水稻の生産に向けての準備を始めている農家の方もいらっしゃるのではないのでしょうか。今回は、生育量、収穫量を確保するための基本的な作業についてご紹介します。

＜塩水選＞

種を播く前に、中身の詰まったよい種もみを選ぶために**塩水選**を行います。中身とは主に胚乳のことです。胚乳は、発芽から生育初期にかけて必要な栄養源であり、これが充実した種子は発芽率が高く、根に活力があり、活着力も優れています。しかし、見た目では見分けがつかないので塩水選を行います。塩水につけると、胚乳が多い籾は沈みます。また、いもち病やばか苗病にかかっている籾は軽い傾向にあるようです。浮き上がった軽い籾を取り除き、底に沈んだ籾を種もみとします。

＜塩水選の手順(種蒔きの2週間前に行います)＞

- ①籾についているヒゲのような芒(のぎ)を除去します。芒があると、種まき機に引っかかるなどして、播種ムラができるからです。脱芒機などを使いますが、少量の場合は種もみ用のネットに入れた状態で、手袋をして揉むと除去できます。
- ②バケツなどの容器に籾を入れ、真水を入れてぐるぐるかき混ぜます。浮き上がった籾は取り除きます。
- ③残った籾を塩水に入れ、かき混ぜ、浮き上がった籾を取り除きます。
- ④③の作業を繰り返し、浮き上がる籾がなくなったら、残った籾を真水でよく洗い流します。
(水洗いは発芽障害防止のため、必ず行いましょう)



	比重	水20Lに対する食塩の量	塩水に生籾を浮かべたときの浮き具合
うるち米	1.13	約5kg	横向きに浮いて、水面に頭がのぞく程度
もち米	1.08	約2.9kg	卵のとがった方を下にして沈む程度



＜種もみの消毒＞

【種子消毒】

薬剤を使って、種もみを消毒する方法です。ここでは、**スポルタックスターSE**を例にご紹介します。この薬剤は、他の薬品に抵抗がついたばか苗病にも効果があるようです。糸状菌および細菌による病害(ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病、苗腐敗症、褐条病など)の同時防除ができるので他の薬剤を混用しなくて済みます。つまり混用による悪影響は心配いりません。

- ①スポルタックスターSE 200倍液(乾燥種もみ量1kg:水2L:薬剤10ml)に24時間、20倍液(乾燥種もみ量1kg:水2L:薬剤100ml)に10分間浸漬します。袋詰めされている種もみに薬剤がまんべんなく浸かるように、薬液の中でよくゆすってください。水温は10~15度が適温です。低すぎると、薬剤の効果が低下する場合があります。
- ②浸漬後、日陰で8時間ほど、種もみを乾かすことで予防効果が向上します(風乾がおすすめ)ただし、使用する薬剤により風乾を省略することがあるので注意してください。

☆イネシンガレセンチュウ予防のため、スミチオン乳剤などを混用してもかまいません。

※種子消毒液は、河川や用水に流れ込むことの無いように適正に処理しましょう

(廃液の処理例)

- ・使用済みの消毒液に活性炭を入れ、薬剤を吸着させる
- ・専用の凝集剤または沈降剤を入れ、活性炭と水を分離させる
- ・上澄みが透明になったら排水し、残さを乾燥させ、都道府県知事に指定を受けた産業廃棄物処理業者に処分を相談する



【温湯消毒】

農薬を使わずにお湯で消毒する方法です。いもち病、ばか苗病、ごま葉枯病、イネシンガレセンチュウを予防することができます。ただし、もみ枯細菌病などの細菌病に対しては効果が十分ではありません。農薬と異なり、残効がありません。育苗箱や浸漬容器、用水は清潔なものを使い、床土は消毒済みのものを用います。

処理方法は、60℃のお湯に種もみを10分間浸けるという処理です。処理が終わったら、すぐにきれいな流水で種もみを冷却します。処理方法は簡単ですが、以下の注意点を守って行ってください。

- ・できるだけ新しく、乾燥した種もみを用いる
- ・処理温度、時間を守り、すぐに冷却する
- ・温湯処理後すぐに浸種・播種できない場合は清潔な場所で乾燥、保管する



＜浸種、催芽、播種について＞

【浸種】

消毒処理後、乾燥させた種もみは水につける**浸種**を行います。これは、種もみを一斉に発芽させるために必要な水分を吸収させる作業です。

浸種をする日数は水温によって異なり、積算温度(水温×日数)で計算します。発芽に必要な積算温度は100℃なので、水温が15度であれば7日間、12度なら8日間が目安となります。

水の交換は、3日目から1日おきに行いましょう。水の交換が不十分だと種もみから抜け出した糖分等で水が腐敗し、また、酸欠状態にもなります。

【催芽】

催芽の程度は、出芽を揃えるために必ずハト胸状態としましょう。(温度は30~32℃で16~20時間程度)

温度が40度以上になると発芽能力が低下するので注意しましょう。

【播種】

育苗箱、1箱当たり催芽籾で125g程度にしましょう。(厚播きをすると徒長苗やムレ苗などの原因になります)

用土や資材は清潔なものを使用しましょう。必要に応じて、これらも消毒しましょう。